

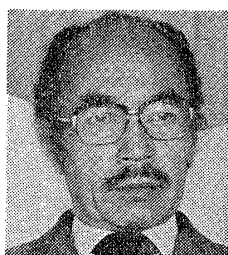
この度は König-Dieterici の健眼 に対する実験、Wright の混色比の3曲線の積分比、CIE の chromaticity diagram 上における色点間の dominant wavelength についての相関関係等を保持し満足する3基礎興奮値を作り出す作業を完成し、近く英文で自費出版する心算でいる。なお興奮値系 chromaticity diagram 上での数個の定理とその2,3の系とを提供する。

Ostwald の Farbengleichung は興奮値から誘導できるので、これを「Ostwald の色彩学における第1命題(定理)」と呼びたい。

以上が私の今日この頃の仕事であるが「笛吹けど人踊らず」となりそうである。

もうひとつの 色彩学を

細野 尚志



色彩の学は1935年 A.C.Hardy の測色学によってその基礎がつくられた。1938年 Hardy の分光光度計がGE によってはじめて製品化され、色彩の記述が数量的にきちんとできるようになった。

しかし、それだけで色彩の学が発展したわけではなく、実はそのことをベースとして色彩の学はもっと発展すべきものであったのだが、この測色学を追うことのみ執心してしまっ、創造的な面への配慮までに至らなかったのではなかろうか。

今日のコンピューター時代になってみれば、色彩の数量的な取扱いは何でもないのでようになってきている。今日はもはやこのハードな測色学を超えたところにこれからの色彩学の発展の余地があるように私は観じている。

それにはどうすればよいか、今までの専門的研究ジャンルを跳びこえたところで、別のジャンルと思っていた分野との接触を深めるところから、色彩という総合的視野から見つめられる自己の研究の独自の目標がつかめてくると考えられる。

これからの色彩学は、分析の学だけではなく総合の学を、ハードな学だけでなくソフトな学を、抽象の学だけでなく具体の学を、定量的学だけでなく定性的学を、といった広い観点から、もうひとつの学を創りださなければならぬのではないだろうか。その辺が遅れているように思う。

日本色彩学会の 発展を喜ぶ

真辺 春蔵



本年日本色彩学会が発足して35周年になると承りまして驚いています。この年数の割に学会の進歩は速かであったと思います。発足当初は数人の研究者達の講演会の感がありましたが、この頃の学会は名実共に立派なものになりました。

会員の皆様が若い新進気鋭の方が多いいせいか、海外の研究者とよく連絡を取り、独善に陥ることなく、健全な研究の道を辿っていることは喜ばしいことであります。

しっかりした研究の成果は国際的にも認められ高く評価されています。1983年9月アムステルダムでのCIE 会議でもそのような感じをうけました。

これからも会員の皆様が国際的にも連絡を取りながら、独自の領域を開拓して国際的にも高く評価されるような研究成果をあげられ、御発表下さいますよう期待いたして居ります。

理論と実際との 握手

山崎 勝弘



レチナ研究会で三重水産大学教授の〈集魚灯用カラーフィルターに就いて〉と題する研究発表が特に印象深く感じられたので、私は休憩時間中に同教授に向って無様に『先生も矢張り海底に潜って、あの美しい青緑色をご覧になったのですか』と尋ねたら、「私は金槌なんです……海底に潜るなんて……」と、そこで私は曾て呉海兵団の依頼でダイビングのコーチに出かけ、海兵と共に秋築ドック付近にある海底洞窟に潜った時、そこには大小無数の魚群がむらがっていて、その水の色は将に硝子の切口のように青緑色を呈していたこと、そしてその主波長は略々495nm 程度の高純度の色であったこと等について説明した。同教授は目を輝かせて、私の手を握りしめ乍ら、「ありがとう……これで私の理論があなたの体験によって裏付けられましたよ」と、その時の感激は今もなお忘れることが出来ないのである。